

地域住民の運動で守られた馬見古墳群

1月12日、健生会友の会山歩きクラブの例会は「馬見丘陵公園散策」でした。

参加者は25～6名。会員でもある寺前憲一さんらボランティアガイドの人たちの案内で公園内の古墳について説明を受け、その後会員の中の野鳥に詳しい人たちのリードでバードウォッチングを楽しみました。



日本有数の古墳群の地

馬見丘陵は大和盆地の西部にある丘陵で、東の高田川、西の葛下(かつげ)川、北の大和川に挟まれた楕円状の台地であり、大和高田市北部から広陵町・香芝市・上牧町・河合町にまたがっています。そしてここには、日本有数の古墳群があり、馬見古墳群と呼ばれ、佐紀盾列(奈良市)、大和(おおやまと・

天理市)両古墳群と共に県内3大古墳群の一つ。

この古墳群の特徴は天皇陵とされるものがない(新木山古墳だけが陵墓参考地とされている)点であり、古代の豪族・葛城氏との関わりが推定されていますが、まだまだ未解明で、多くの謎を秘めた古墳群なのです。



↑復元されたナガレ山古墳

で、古墳そのものが重機で破壊される事態が起きてきたのです。

古墳守れの住民運動

この事態を憂えて「古墳群を守れ」の運動を展開したのが、「広陵古文化会」を中心とした地元住民でした。献身的で粘り強い運動が実を結んで、「この歴史・文化遺産や素晴らしい自然環境を憩いの空間として広く活用してもらうことを目的にした」(馬見丘陵公園発行のパンフ)公園が作られたのです。

思い出す羽根田一郎さんの活動

公園を巡りながら、私が思い浮かべたのは羽根田一郎さん(故人)という先達の面影でした。氏は広陵古文化会の講師も務めたこの運動のリーダーの一人。戦前から活躍した画家で郷土史家、2期8年間広陵町議(共産党)を勤められ、人々の生活向上と平和に心をくだきながらも、その後半生を馬見古墳群の保存とその研究にささげたといっても過言ではありません。 **ボケ⇒**





私自身、羽根田さんから歴史だけでなく、様々なことを教えていただきました。

羽根田さんの後継者として広陵町議となった寺前憲一さんは、羽根田さんと共に、古墳群保存運動に携わっただけに、この日の説明も住民運動とその成果にも触れて、的確なものでした。

文化財保存の原則を示した運動

当時奈良県文化財保存対策連絡協議会(奈文連)事務局長だった故鈴木良元立命館大学教授は馬見古墳群保存運動について「文化財を真に

↑ロウバイ

守る唯一の方向—それはその地域に働き、生活している住民が、よりよい生活環境と文化をもとめて町づくりを行う民主主義の成長とかたく結合している。その中でこそ、郷土の文化財が正しく守られ、生かされてゆくのである。これが文化財保存運動の根本的な原則であり(中略)、このことを羽根田一郎さんと広陵古文化会の皆さんから学ばせていただいた」(1978年4月羽根田一郎をしのぶ会で講演)と述べています。

サンシュユの実→

この日出会った花と鳥

空気は冷たいものの快晴、青空に映えてウメ、ロウバイ、ヤブツバキ、サザンカ、ボケなどが目立ったし、サンシュユの深紅の実が目目をひいていました。

野鳥観察ではカワウ、オオバン、マガモ、アオサギなどの水鳥、キジバト、コゲラ、ヤマガラ、ヒヨドリ、メジロ、ツグミ、ハクセキレイ、カワラヒワ、イカル、シメなどを見ることが出来ました。

この例会を準備した方、双眼鏡、スコープなどで観察・説明に当たられた方々に感謝します。



続・続・二上山に咲く花々 6 ヤシャブシ (夜叉五倍子)



カバノキ科ハンノキ属

写真 澤木仁さん

花言葉は「永遠」

花期は3～4月

雑木林に自生する落葉小高木。3月ごろ開花し、雄花序は5cm程で、枝から垂れ下がり、雌花序は少し下部から直立します。

植物名は熟したごつごつの実を夜叉に見立て、その果穂を五倍子(ふし・黒色の顔料)の代用としたため。

日本固有種。